巻頭言

文書館の方へ

関根敬一郎

社会的な存在としての〈ひと〉は、個人としても集団としても実にさまざまな役柄を帯びて活動するものだ。私人、家族、地域住民、組織・団体の成員、ある種の措定された人格（例えば「機関」）として、など。職業一つとってみても、その活動の分野・領域は多岐にわたって広い。したがって、各時代のそれぞれ異なる社会情況のもとに置かれた人間生活の種々相を、行為と表裏の関係にある〈形跡〉に留める仕方もまたさまざまであるといってよい。歴史の記憶を形跡に残すそれら情報資源は、あるがままの現象を映して渾然としている。

その中でも文字や絵画的方法による記録は、時代と時代との間での意味変換、意思の継続的な伝達、論理的な認識への到達、反省への契機などを可能にする点で、優れた特性をそなえている。われわれが文書・記録の保存を重視し、史料として研究の対象とするのは、一体何を目的とするからなのだろう。行為がすべての形跡の前に出るように、人間の社会内-現存在の必需はすべての文書・記録に先立つ。したがって、かつての生の所産が今の生の営みの中に流入し、新たな作用を惹き起こして歴史的連関を成り立たせるところに、第二の生命体とでも言うべきものの活動が現前すること、この非記録的な現象の歴史的継起に全てはかかっているのではないか、と思う。

文書・記録の貌はなかなか捉えにくい。地下茎のように社会的諸活動の基層部に形成されて、行為の単位ごとに個人や集団の当事者範囲での消息を情報としてカプセルに込めているからだ。それは雑多ではあるがその時代に対してその時代が持った関心や生起した事象をあるがままの状態で遺留する。著作者意識がなく、無作為・無名性を自明のこととしている集合表現・代理表現・私的表現。伝承された真正の原資料はわれわれに迎合しない、とブルクハルトが言った意味で、事実と関係と情況に即し、自らをそこに〈封じて〉いる。これに対して、書籍などの著作刊行物は意識的な表現の形式をとり、それ自体が行為の目的となって伝播され、不特定多数の者に認知を求めつづける。だが著作刊行物は一部の表現の送り手に依存する市場的な産物であるが故に、社会的諸活動の総体の表出という点で自証性に欠けるところがある。

現代に所属するわれわれは、常に最新の過去までの成果の上に立っている。したがって、時代の営為の経験的な質は過去の実相をいかに活用するかにかかっていると言うことができよう。文書・記録はその時代のすべての〈ひと〉の多様な意思や行為の集合的な記録であるから、継承関係からいって、後代にとっても一部の目的、一部のひとの活用に供せらるべきものではない。現代に所属するすべての人々の行為の在り方にかかわっている。このカプセルを開くのは住民の広範な問題意識、社会参加、閲覧による自学、歴史的関心であろう。このため、時代と時代の回路をつなぎ、学習の仕組みを用意する、媒介者と社会制度の役割は重要である。公私の文書館の必要性に目を向けよう。